

## 若手の会だより

第 56 回生物物理若手の会夏の学校開催記  
～ひとときの暑さを偲びつつ～

田宮裕治

北海道大学院 D3

北海道は熱しやすく冷めやすい土地だ。  
道民生活 3 年目にして思う。

### 一「北海道は涼しいぞ」

かくの如きキャッチコピーで人目を惹いたポスター。しかし、いくら北海道といえど、暑い時にはとかく暑い。

ただし、本州と比べて異なるのは、名残り惜しむ間も無く一瞬にして過ぎ去ってしまうこと。ひとたび天気が崩れると、あれよと言う間に秋風が吹く。

北海道に残暑という言葉はないのかもしれない。

\*\*\*\*\*

生物物理若手の会 夏の学校, 通称 生物物理夏学。

「若手」の定義はその人の心持ち次第だが、主に学部生～大学院生, PD・助教が全国各地から集まる合宿型研究交流集会。

2016 年度第 56 回は北海道 支笏湖にて開催した。

過去数年の参加者減少, 参加層固定化, 学部生・女性・物理系参加者の手薄さ。これでアクセスの悪い北海道と続くと, 下手したら再起不能なほどの悲惨を極めかねない。そう思い, 今年はポスター, HP, Twitter などによる宣伝告知に力を入れた。また, 大変ありがたいことに企業協賛金や各種団体助成金も例年より多く頂くことができ, 参加者には学部生割引と手厚い交通費支援が確約された。

その甲斐あってか, 参加者総勢 83 人。うち, 学部生・女性はともに 2 割を超え, 新規参加者は 80% に上った。

研究テーマ・バックグラウンドも, 理論から実験まで, 幅広く集まった。中でも, 特に今回は, 普段大多数を占める細胞・タンパク質科学に加えて, 数理学, 合成生物学が異彩を放っていた。というのも…

### 「無生物から生物までの物理, なんてどう?」

東北スタッフメンバーの齋藤明は言った。

遡ること 1 年前。北海道と新たに立ち上げた東北支部での開催が決まった夏の学校。

しかし, 早くもテーマ決めで難航した。

ただでさえ広くてとりとめのない「生物物理」という分野。「生物物理夏学」として, 一堂に会する意味はなんだろうか? 異なる話題がゆるく繋がりあう学際領域だからこそ, 何か一つの目的を共有して, 参加者・講師一体となって有機的な議論を繰り広げたい。

確信を持てる方針が定まらず, 徒に時が過ぎていった。上記の齋藤の言も, いまひとつ自信が持てなかった。分科会の一セッションでもいいのではないか?

そんな折, 北大スタッフ 秋田大は言った。

「生命とはなにかについて, 多様な意見が聞けて面白そう。」

### モフモフしたものが「生命」です by 木賀先生

開催テーマ: 無生物から生物の科学

一物質と生命の違いを出発点に, 各々の生命観をぶつけ合う

「物理」ではなく「科学」としたのは, 分野に囚われずより広く議論の輪に加えたかったからだ。

特に 2 日目のメインシンポジウムでは, 木賀大介先生 (早大, 合成生物学), 原田慶恵先生 (阪大, タンパク質一分子計測), 佐野雅己先生 (東大, 非平衡・非線形物理学) をお招きし, 異なる立場から先生方の考える「生命らしさ」を軸に連続講演をしていただいた。

さらに続くグループワークで 6~7 人グループで述べ合った意見・感想を, パネルディスカッションにて先生方にぶつけつつ, 「生命」とは何か? 「生命」を「理解」するにはどうすればよいか? を巡って活発な議論が交わされた。「生命」の定義は何か? から始まり, 果ては意識はどこで生まれるのか? 知能と意識は何が違うのか? という, オープニングセッションの郡司ベギオ幸夫先生 (早大) のお話を彷彿させる話題にも及んだ。

多種多様な講師・参加者が集まったからこそ, 予

想を上回る縦横無尽な盛り上がりであった。

参加者同士の交流も、時に講師を交えながら活発に行われた。毎晩のポスターセッション・懇親会では、深夜1時、2時に至っても喧騒が収まることはなかった。酒を酌み交わしつつ研究の話から進路の悩みの話、他愛もない話、将来の夢の話まで、夜明が白もうが至る所で話し声が響き渡った。

分野横断的な交流、ここに至れり。

かくして、会場内に熱狂が途絶えることはなかった。

### 北海道は涼しかったですか—————！？

閉会式。最後に校長 田宮がそう叫んだとき、外では小雨が舞っていた。

2016年9月5日(月)午前11時44分—第56回生物物理若手の会 夏の学校が無事幕を下ろした。

あれだけの賑わいを灯した参加者達も、空港行きのバスが来るたびに半分、また半分と減っていった。

最後にスタッフと残った数人が後にしたとき、会場は何事もなかったかのようにひんやりとした静寂と暗がりに包まれていた。

以降、札幌の気温は右肩下がり。

あの暑さは、二度と戻っては来なかった。

\*\*\*\*\*

北海道は熱しやすく冷めやすい土地だ。

しかし、短い夏といえど、その鮮やかな彩りは人々の脳裏に焼き付けられる。

3泊4日、思い返せばたったひとときのお祭り騒ぎであったが、各々が普段の大学・研究室生活では得られないかけがえのない経験を持って帰ったと思う。異分野の友達ができた、学問の視野が広がった、来年もまた参加したい、様々な反響を頂いた。

もう少ししたら、北海道は雪に閉ざされる。そして年が明け春が来て雪が融け草木が芽吹き、また夏が訪れる。

そして来年2017年、第57回の夏学は、関東にて開催予定である。それまで皆様、お元気で。

開催に先立ちご支援頂いた学会・財団・企業様方、ご講演を引き受けてくださった先生方、会場 支笏湖ユースホステルの皆様、全国各地の若手の会の皆様・先輩方、田宮の無茶振りに答えてくれた運営スタッフの皆様、そしてはるばるお越しいただいた皆様に感謝の気持ちを込めて。



2日目 メインシンポジウム終了後の集合写真。参加者総勢83名、講師計12名。



グループディスカッションの様子。時間が過ぎても活発な議論が続いた。



参加者の半分以上が発表を希望し、会場の至る所にポスターが貼られた。